

INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS

情報知識学会ニューズレター
1998.2.1

48

情報知識学会事務局 発行〒110 東京都台東区台東 1-5-1(凸版印刷(株)内) TEL03(3835)5692 FAX03(3837)0368 ISSN0915 1133

目 次

[巻頭言] 電子メール、SGML、そしてアーカイヴズ.....	1
[お知らせ] 平成10年度研究報告会	3
[お知らせ] 学会創立10周年記念事業	4
[提案] 情報学の基礎に関する共同研究の提案	4
[提案] 田隅先生の「コデータとコデータ部会について」について.....	6
[報告] 歴史研究と電算機利用ワークショップの開催と題目一覧.....	8
[報告] 第4回著作権シンポジウム	12
[お知らせ] ホームページとメーリングリスト	14
[お知らせ] 年会費納入の時期と方法	15

【巻頭言】

電子メール、SGML、そしてアーカイヴズ

駿河台大学文化情報学部教授：安澤 秀一

学術会議情報研連の委員会で、アーカイヴズとは何か、という報告をさせて頂いたことから米田幸夫・藤原鎮男、両先生の知遇を得、1988年に情報知識学会が設立される際、文系の人間も参加するようにとお勧め頂いた。以来、理事会の席に出させて頂くことになった。

正確な日時は忘れてしまったが、ごく初期の理事会で岩田修一理事から連絡用に電子メールを使いましょうというご提案があった。個人用にはワープロ専用機を利用していた当時の私には思いも寄らない難問であった。もちろんワープロ専用機でも通信機能を付加できることは知っていたものの、手の及ばないはるか彼方の事柄と思っていた。そして折角の岩田さんのご提案は時期尚早と言うことで、その時には実現しなかったように覚えている。

学会ニューズレターは最初、岩田理事、ついで長瀬理事のご苦勞で順調に発行できた。やがて研究機関誌の発行実現が目論まれた。その時、当時の米田会長からSGML利用の刊行という希望が強く表明され、実務執行に根岸正光、石塚英弘、両理事が当たられることになった。SGMLという言葉自体、当時の私には初耳であり、印刷版面を作成する際の手順ぐらいにしき理解しなかった。理事会が開かれるたびに、両先生から英文は上手いくが、日本文の割付がたいへん難しいと言うお話が出た。その後も何回か研究機関誌の発行にSGML適用が行なわれたが、私は相変わらずSGMLについて無知のままであった。

ところで私は1990年3月に国文学研究資料館史料館を定年退官となり、明海大学経済学部奉職したが、1993年4月に駿河台大学に移って文化情報学部設置の準備をすることになった。幸い翌1994年4月に発足できた。この学部の教育目標はコンピュータリテラシーを基盤に多種多様な人工情報資源（データベース）について管理運営に当たれる人材養成にあ

る。文系の学部であることから、大型汎用電算機よりも使い勝手の良いであろうパーソナル・コンピュータの導入を考え、パソコン利用環境の整備に努めた。習熟用のソフトはマイクロソフトのウインドウズと、その系列のアプリケーションとした。そして以前から使用されていたコンピュータ教室の改善はもとよりであるが、2年目からは文化情報学部の学生全員にノートパソコンを購入して貰い、学部の専任教員全員も同じ機械を持ち、学内LANによる電子メールの教員相互および教員と学生とのやりとりを始め、インターネット接続を実現した。

つまり1988年には思いも寄らなかった電子メール利用を、学部長として推進する役割を演じることとなってしまった。もちろん技術的な面ではコンピュータ系の小林教授が遂行して下さったことはいうまでもない。岩田さんがこの文章を読んで苦笑されることと思うが、電子メールの利用を推進できたのは情報知識学会理事会での電子メール可否の場に居合わせたという記憶が強くあつてのことであり、厚く感謝していることを述べておきたい。

またニフティサーヴ・歴史フォーラムのシスオペ・マネージャーをされている児島秀樹さん(明星大学人文学部助教授)が1993年の情報知識学会人文社会系部会「第3回歴史研究と電算機利用ワークショップ」に参加され、私に強くパソコン通信を勧められた。そして私もようやく重い腰を上げて通信を始めたことも書いておかねばならないであろう。その上、情報知識学会の会員となられた児島さんのお勧めもあり、理事会で承認を得て、歴史フォーラムの中に「情報知識学会」会議室を設置して学会情報の普及に役立てることが出来た。この会議室は歴史系の人たちの間で結構重宝な情報ネットワークを形成しているものと思う。

さらにインターネット接続が容易になったことから、私の研究領域であるレコード／アーカイヴズ・マネイジメントの最新情報を求めて、様々な国のアーカイヴズ関連のホームページを覗くようになった。そこで見出したのはレコード／アーカイヴズ・マネイジメント界におけるSGMLへの強烈的な関心であった。またもや私の不明と出遅れを思い知らされたのである。

またイーヴァン・モーズリイ／トーマス・ムンクの共著「Computing for Historians: An Introductory Guide」1993年マンチェスター大学出版会刊行を入手して翻訳を考えた際にも、史料翻刻とDTD、SGML、TEIなどの関連が述べられており、愕然としたものである。この邦訳「コンピュータで歴史を読む」は1997年4月に有斐閣から刊行することが出来た。そしていくつかのコラムを共訳者が付したが、その中に田良島 哲(文化庁)さんがSGMLについて適切な解説を書ってくれたので、一安心しているところである。

私がインターネットに接続する時、最初に入るサイトは通常、イギリスの[Archival Repositories on the internet in the UK: <http://www.liv.ac.uk/~spw1/uksites.htm>]である。その冒頭に、[Other useful links][Professional Associations][to e-mail me][Non-UK sites][Home]という五つつのリンク先が見える。ここからイギリス国内であろうと、国外であろうと、簡単に接続できる。まさにネットワーク・リンクの威力を実感できる。

イギリス国内でのオックスフォード・テキスト・アーカイヴを覗くと、1994年に大宮で開催されたFID大会の折、第4回「歴史研究と電算機利用ワークショップ」との共催というかたちで「FID/ARM (Archives and Records Management)」を実行した時の報告者の一人、ルー・バーナードが、C. M. スピルバーグ＝マックイーンと共著の「アーキヴィストのためのSGML」において、[A Gentle Introduction to SGML]という長大な解説を掲載している。これに気がついた後、私にとってSGML/XMLについての情報と知識を求める限らない探索の旅が始まったのである。

【お知らせ】

情報処理学会創立10周年記念
平成10年度研究報告会

平成10年(1998)5月23日(土)

21世紀の情報化社会を先導する情報知識学の展望
－これまでの10年とこれからの10年－

すでに本ニュースやホームページなどで案内されているように今年は情報知識学会が創立されて丁度10年目に当たることになる。この期間はインターネットとダウンサイジングで情報環境が大きく変わり、21世紀における新しい情報化時代への移行の時といえる。

そこで今回の研究会は従来の情報における基本課題を明確にし、今後の情報化の展開の方向と内容および情報知識学の意義について検討する契機にしたいとの趣旨によって主題と副題が上に記したように定められた。

具体的にはこれまでの研究会、ワークショップ、講演会、論文誌等でも取り上げられてきた各種の問題点を下記に示すように整理して、夫々の分野別に現状と課題に基づき今後の展開について研究成果を発表し、討議する場としたい。できるだけ多数の会員の積極的参加を期待します。また招待講演者やプログラムについて提案、注文その他お気付きの点は事務局までお寄せ下さい。

主要な研究分野

1. 情報知識学基礎理論：従来の理論の適用範囲と限界、新理論、新モデル
2. 情報解析：用語解析、自然語解析、特性解析、意味解析、構造解析
3. DL(電子図書館)、DM(電子博物館)のコンテンツ管理と高度利用
4. マルチメディア情報と可視化(Visualization)
5. SGML-CALSと情報流通
6. TeX - HTML - JAVAと情報発信
7. 情報化社会：教育、文化、研究、開発、生産、流通、知的所有権、経済、環境、政治、倫理、生活などでの応用とインパクト
8. データベース、知識ベースから情報ベース、自己組織化知識資源への展開
9. 情報からみたソフトウェア：Windows, CE, UNIX など
10. 情報のための計算機アーキテクチャー
11. 情報流通のための通信システム

研究会組織委員 藤原 譲

【お知らせ】

学会創立 10 周年記念事業 - 共同研究テーマの募集

情報知識学会事務局

10 周年記念に共同研究

情報知識学会は今年創立 10 周年を迎えます。10 周年記念事業として、何をすればよいか、いろいろな意見や提案があると思われますが、その一つとして、当学会にふさわしいテーマで共同研究をし、その成果を発表したらどうかという案が理事会で決定しました。そのために、次の要領でテーマを募ることになりました。ぜひよいテーマをお寄せくださるようお願いいたします。

(1) テーマ選定

3 月 20 日までに、共同研究としてふさわしいテーマを事務局宛提出、その中から 3 つ候補を理事会で選び、そのテーマについて共同研究のためのタスクフォースのメンバーを募る。5 名以上の参加者があれば、10 周年の記念共同研究テーマとする。共同研究のメンバーには、当学会以外の人に参加しても差し支えない。

(2) 共同研究の実施

参加メンバーの中から主査を決める。必要なら、研究指導顧問を置く。テーマによっては分科会をつくり、効率よく研究作業を行う。会合中心では、地域的制約を受けるので、電子メールなどを使い、サイバースペースで共同研究をするのが望ましい。研究期間は、原則として 98 年 5 月より 10 月末までとする。

研究成果 (未完成の場合でも、中間報告として) は、原稿にまとめ、当学会機関誌に発表し、研究成果によっては、出版など別のかたちでの発表形式も考える。

【提案】

情報学の基礎に関する共同研究の提案

IT 経営研究所所長 平田 周

個人的提案として、情報学に関する基礎研究を 10 周年の共同研究テーマとしてはいかがかと思う。情報とは何か、情報学とはどのようなカテゴリーを指すのか。この問題についての関心は高く、情報処理学会などでも研究がなされており、断片的にはいろいろな著作や論文に意見が発表されている。しかし、体系だった研究はあまりなされていないように思われ、確たる新しい理論の提案もなさそうである。新たに情報を定義することは容易ではないが、挑戦してみる価値はあり、少なくともこの方面で行われてきた研究努力を文献学的にでも発掘することの意義はあろう。

昨年 10 月、文部省は「体系的な情報教育の実施に向けて」と題した第 1 次報告を発表した。中等・高等学校での情報教育のあり方について論じたものであるが、内容はこれまでどおりコンピュータ教育関連が基礎にはなっているものの、「情報学」の必要性を指摘している点で注目される。しかし、学問的に情報学とはどんなものなのかなど、内容的には一切触れられていな

い。ただ、「ここでいう情報学は、従来のコンピュータや情報通信などの分野を中心とした情報学に、人間科学や人文社会学等への学際的な広がりを持った学問である」という説明にとどまっている。

情報とは何か。厳密な定義となるとシャノンの通信理論や、エントロピーをもちだすことになる。しかし、これでは一般に人々が使う「情報」の意味は説明できない。

おびたしい数の学会があるが、そのほとんどは学問体系にそった研究目的で領域を分けている。古代ギリシャ哲学から分岐していつて学問は、無限に細分化して広がる傾向を止めることはない。インターディシプリナリーな領域が問題になると、それがまた一つの学問領域になる。諸学のインテグレーションが必要だとされるが、現実には不可能に近い。情報化時代に脚光を浴びる「情報」は、これらのすべての学に共通するものであり、諸学を統合することは出来ないまでも、横断的にとらえることはできるはずである。この点にこそ、情報知識学会が他の学会とは異なる存在意義を主張できるのではなかろうか。

情報学のカテゴリーがどのような範囲まで及ぶものか、共同研究により手分けをしてさまざまな文献にあたり、検討をしてみたいものとする。私見では、コンピュータの範疇での情報ではなく、広く一般的な意味での情報を対象にすべきで、参考までに述べれば、情報学を(1)情報哲学(2)情報科学(3)情報文化学(4)情報産業学の4つの領域にまず大別し、その中を細分類していくという方法が可能ではないかという気がする。アメリカでは情報経済学という言葉も使われ始めている。これについて、たとえば、次のように例示すれば、イメージが得られるかもしれない。もちろん、内容的には、共同研究の結果、これとは大きく違ったものになる可能性もあろう。

情報学の体系試案

情報哲学	情報の本質、情報倫理学、知的所有権、言語学など
情報科学	情報理論、認知学、人工頭脳、人工生命、カオス、フラクタル、複雑系、コンピュータ言語、SGML/XML など
情報文化学	メディア論、情報社会学、情報心理学、文学、歴史学など
情報産業学	経営学、情報経済学、情報システム論、リスク管理など

以上のような考えから、10周年記念となる共同研究テーマとして、提案したいと思う。これについて、ぜひ忌憚のないご意見をいただければと思う。また情報学というテーマに関心をお持ちの方があれば、ぜひ学会事務局か、私宛にご連絡いただけるなら、たいへんうれしい。私への連絡先: FAX 03-3456-4308、E-mail LDG01371@nifyserve.or.jp

【提案】

田隅先生の「コデータとコデータ部会について」について

三洋情報システム株式会社 松倉 利通

1997年12月1日発行の INFORMATION AND KNOWLEDGE NEWS No.47 に掲載されている田隅先生の「コデータとコデータ部会について」に関し、永年物理化学分析データや特許データの流通に従事し、また日米の鉄合金及び超合金成分特許データのデータベース作りを行ない、(情報の流通を通して社会に貢献する)ことを会社のモットーとしている者として、商業ベース側から見た基礎データの製作、収集、配布及びその利用面について、僅かな分野の経験ではあるが報告と私見を述べてみたい。

1950年代の後半に米国の私立化学分析受託研究会社である Sadtler 社の代理店となった会社で赤外線分光、紫外線分光の分光分析データと、当時 ASTM の中に在った JCPDS のX線粉末回折データの販売に携わったのが本格的に物質のデータと関わり合った最初である。その縁で1961年に米国でIBM社のトレーニング スクールのプログラム作製とオペレーションの訓練を受けた。米国では当時既にIBMパンチカードを利用した赤外線分光分析データベースがASTMから発行されており、更に米国商務省により U.S.Government Research & Development Report の磁気テープによるデータベース化が始められていた。

CODATAに興味を持ったのは、新しい仕事として分析データの販売を拡充する為の情報の収集手段としてである。この為パリの本部に会費を納めて会員となり、Bulletin 及び Newsletter を入手することからCODATAとの関わりが始まった。従ってあくまで営業的発想による些か学問とはかけ離れた動機ではあるがCODATAの意に沿った仕事をしていると云う自負もある。Bulletin と Newsletter を通して生データの製作過程やその内容の勉強が出来、又新しいデータ製作の最新情報を得たことは非常に有難く、現在も Newsletter を通して続けて最新の情報を得ている。1960年代には既に海外で赤外線分光分析、紫外線分光分析、ラマンスペクトル、Thermodynamic Properties、質量分析、X線回折等のデータが機械可読型データベースへと進み始めていた。丁度その頃日本では1960年から赤外ラマン討論会 赤外データ委員会(委員長:水島三一郎、実行委員:島内武彦、中西香爾、平山健三、益子洋一郎)が結成され、ハンドソートのIRDCカードと称する赤外線分光データの発行を行い始め、筆者はそれらのデータの輸出を試みた。残念な事に、これはその後試料の入手難その他の理由により発行が中止された。

現在世界に流通している分析データは何等かの形で事業化されたものが大部分であると思われる。政府のプロジェクトとしてデータを集めたり小数の特殊分野の人が集まって発表したデータ類は、そのままその専門分野に埋もれてしまつて再利用の機会が非常に少なくなっているのが現状ではないかと思う。一部の基礎データが、収益に連がるものとして企業化かされている、ことは「研究の為の相互利用を自由に行うと云う伝統的な考え方」とは相容れないものがあるかもしれない。しかし、現在その発行が継続しているものは殆ど商業ベースで成立する様な確固たる経済的基盤をもって収集、発行、頒布が行われ、広く基礎データとして学会、産業界に利用されている。これらの事を考えると、データの評価、収集、流通の促進を図るにはその経営基盤がしっかりしていないと結局は利用価値の高い貴重なデータが埋没し、データベースとして再利用の機会を失ってしまう可能性が非常に高いことを示していると思う。

そこで筆者が関係している J C P D S—I C D D の組織と活動状況を簡単に報告し、データの収集と配布及び継続性について私見を述べてみたい。I C D D の X 線粉末回折データはそもそも米国 D u p o n t 社の化学者が始めたもので、その後 1941 年に A S T M の中に Joint Committee on Chemical Analysis by X-ray Diffraction Methods が設立され、現在はペンシルバニア州の非営利団体として X 線粉末回折データの発行を継続して今日に至っている。この団体は基本的に事務局の職員（殆どが科学者）を除くメンバー全員がボランティアで成り立っており、全世界から約 100 名の科学者が集まってこの事業を行って居り、日本も日本セラミックス協会の日本粉末回折データ委員会（委員長：丸茂文幸）が協賛団体として参加し、Active Member を送り込んでいる。メンバーは年 2 回の会合に出席し 14 の小委員会の幾つかに所属してデータの収集、評価その他の活動に必要な事を決定し、各々の作業に従事している。ここで現在進められているプロジェクトの一つに、他のデータと X 線粉末回折データの関連付けがある。その一つとして F I Z の I C S D からの計算値粉末パターン化による関連付けがある。計画としてはその他のデータベースとの関連付けを全て粉末データに結び付けて行うことである。関連分野全てのデータベースと相互に何等かの K e y に因って結ばれるならば、データの利用率は飛躍的に高まり、貴重なデータの埋没を救うことが出来ると思われる。しかしこのような活動を行うためには学会の協力とそのデータ活動に情熱を燃やす人々の活動による定常的な収入が不可欠である。

.....

【報告】

「歴史研究と電算機利用ワークショップの開催と題目一覧」

駿河台大学文化情報学部教授：安澤 秀一

1988年、情報知識学会が発足し、私も理事会の末席に連なることとなった。学会が研究大会開催、ニューズレター発行、研究機関誌発行という中枢での活動を軸とするとともに、周縁を固める学術活動の場として部会活動の必要性が提示された。米田会長から人文社会系部会を担当するようにと、私に指示があった。当時の私は、国文学研究資料館史料館に勤務しており、すでに行なっていた全国的な規模での近世史料目録収集事業に関連させて、その収集した紙媒体のままの史料目録の所在情報を、コンピュータ処理によるデータベースに変換して利用に供するというプロジェクトを推進していた。情報知識学会の部会活動として、何をしたら良いのかを考えた時、私に出来ることは、歴史研究分野でのコンピュータ利用の可能性とコンピュータ操作の実務についての情報交換の場を広く提供することであろうと思った。

開催毎に名称が少し違ったり、参加者の範囲に差があったりしたが、情報知識学会人文社会系部会の名のもとに行なってきたワークショップも回を重ねて、1997年度末までに8回の開催を数えることができる。できるだけニューズレターに報告してきたつもりではあるが、今になってみると、全てをニューズレターに掲載したかどうか、いささか心もとない気がする。私は今期をもって理事会から退くので、これまでの成果を記録化しておこうというのが本稿の趣旨である。ただし会合ごとに作成し、参加者に配布した報告集全文の掲載は無理があるので、開催場所・期日・報告者氏名（当時の所属は現在と異なる場合があるので省略する）・題目だけにとどめ、敬称も略さざるを得ない。ご寛容のほどを願うものである。ただし1997年度開催の3回については最近のことでもあるので、所属と要旨を示すこととする。

第1回：「記録史料と電算機応用に関する課題と解決—歴史研究素材としての史料を電算機処理する以前の問題点発見」

研究集会：オーガナイザー森 安彦教授

期日／場所：1989（昭和63）年4月1・2日：東京九段フェアモントホテル
福武学術文化振興財団研究集会助成金交付を受けた。

0 A. 研究集会代表者森安彦挨拶

0 B. 研究集会主旨説明：安澤 秀一（情報知識学会ニューズレター3号掲載）

0 1. 中野美智子：岡山藩人物情報データベース「諸職交替」について

0 2. 川口 洋：「宗門改帳」データベース（DANDIER）について

0 3. 永田治樹・増田元・竹内比呂也：文書目録情報のデータベース化の問題について

0 4. 阿部 昭：文書・記録検索システムの試み

0 5. 山田 哲好：近世・近代史料所在情報のデータベース化

0 6. 石上 英一：史料学とデータベース

0 7. 永村 真：東京大学史料編纂所における古代中世の古文書聖教類データベースの構築

0 8. 水口政次・水野保：近代行政文書目録作成時の電算機応用

0 9. 周防 節雄：SASによる統計書誌情報データベースの構築

1 0. 松田 芳郎：明治期の統計データの復元について

第2回：「歴史研究と電算機利用の可能性―歴史系大学院生を対象とするワークショップ」

研究集会オーガナイザー：永村 真教授

期日／場所：1991（平成3）年9月21・22日：中央大学駿河台記念会館

福武学術文化振興財団研究集会助成金交付を受けた。

01. 安澤 秀一：基調報告
02. 八重樫純樹・永村真：実践例紹介―諸機関における活用事例
03. 内田 金生：パソコンを利用した資料整理の一事例（当日急病のため不参）
04. 村越 一哲：大名家臣団の系図分析におけるパソコンの利用―系図データの数値処理と歴史的評価
05. 五島 敏芳：歴史研究の作業環境の整備―交通史データの多様な活用
06. 永村真・大月豊寛：漢字OCR装置の機能紹介・デモ―漢字文字列入力機能の長短所
07. 桜井 昭男：多摩市史の目録作成とパソコン―目録作成の実例と調査でのパソコン利用
08. 荒巻 喜光：テキストファイルを利用したデータの応用について―論文・目録作成におけるデータ処理のテクニック
09. 佐藤正広・柴田貴行：自治体史編纂とパソコン―編纂作業でのパソコン利用の分野と効率
10. 保坂祐興：パソコンによる歴史資料目録作成の一事例―処理目的とデータ構造の関係
11. 全体討論
12. 安澤秀一・永村真：総括

第3回：「歴史研究と電算機利用の可能性―歴史系大学院生を対象とするワークショップ」

期日／場所：1993（平成5）年9月18・19日：駿台電子情報専門学校

研究集会オーガナイザー：永村 真教授

<<この時の資料が手許で見つからないので、別の機会に報告することにした。>>

第4回：「歴史研究と電算機利用の可能性を探るワークショップ」

FID/ARM (Archives and Records Management) と共催

研究集会オーガナイザー：井上 如教授

期日／場所：1994（平成6）年10月4・5・6日：大宮ソニックシティ・神奈川県立文書館・駿河台学園箱根セミナーハウス

福武学術文化振興財団研究集会助成金交付を受けた。

00. 安澤 秀一：Welcome address
01. John Evans (Univ. of Papua New Guinea) : Records and Archives Management
- A Papua New Guinea Report
02. 山田哲好・安藤正人 : The Development of a National Database of Archival
Information in Japan
03. 中野 美智子 : A new Attempt at the Cataloguing of Archives of Daimyo
- The Example of the Ikedake Bunko, the Archives of the
Former Government of the Okayama-Han -
04. 水谷長志・田窪直規 : Renewal of Art Treasure Survey and Art Documentation
- Expansion and Alterations in Art Museums in

Present-day Japan -

05. 井上 如 : An Assessment of Effectiveness of Information Management at the Hakone Barrier Gate Via an Analysis of Personal Diary of a Gate Official
06. Lou Burnard(Oxford Text Archive) : Towards On-line Browsing of a Textual Archive ; taming the TEI
07. 植村 達男 : Not a Library, but an Information Centre - A Case Study of Sumitomo Marine Insurance Company -
08. 寺坂文男・越山素裕 : Shimizu Corp, Document Management System
09. 高山 正也 : Problem and Usage of the Optical Filing Systems for Business Documents Management in Japan

以上のように、F I D / ARMとの共催であるがために、ワークショップとしてはやや異色の内容となったので、若干の説明を加えておく。

第1日目は大宮ソニックシティ会場において報告が行なわれた。国際会議としての公用語が英語であるため、日本の参加者もすべて英文の資料を配布、そして英語による報告であった。なおパプアニューギニア大学のエヴァンス氏が来日できなかったのも、同大学アーカイヴズ学科長が報告を代行し、エクスカッションにも同行してくれた。オックスフォード大学のルー・バーナード氏は大宮会場での仕事の関係からエクスカッションには参加できなかった。

第2日目は駿河台大学提供のバスに全員が便乗し、新設の神奈川県立公文書館を見学した。その後、箱根仙石原にある駿河台学園箱根セミナーハウスに向かい、箱根路の景色を楽しみ、またセミナーハウス到着後、温泉入湯、歓談、夕食をともにしたあと、一泊した。

第3日は箱根から大宮会場に戻って、F I Dにおける他の会議に参加した。

第5回：「歴史研究と電算機利用ワークショップ - ネットワークと歴史学 -」

研究集会オーガナイザー：児島 秀樹氏

期日／場所：1995年9月9・10日：駿台電子情報専門学校

- 00：児島 秀樹：基調報告
- 01：伊東 宗裕：資料の電子化とその課題
- 02：田良島 哲：電子史料目録情報の標準化について
- 03：坂村 健：多国語とTRONプロジェクト
- 04：勘坂 純一：中世イングランドの農村・町・市場
- 1279年 Hundred Rolls の分析を中心に -
- 05：安澤 秀一：松江藩の財政史料 - 原史料と数量化への手続き
- 06：古瀬 幸弘：シェアテキストプロジェクトとマークアップ言語
- 07：家辺 勝文：日本語デジタルテキストの簡易マークアップ

第6回：「歴史研究と電算機利用ワークショップ」

研究集会オーガナイザー：児島 秀樹（明星大学人文学部）

期日／場所：1997年7月26日：駿台電子情報専門学校

01. 上条 雅道（ゆまにて書房）・黒田 義人（ニチマイ）：CD-ROM版「風俗画報」について

要旨：明治22年2月創刊、以来大正5年3月まで刊行された「風俗画報」は挿絵や写

真の多い貴重な歴史資料である。これをCD-ROM 11枚に収めた。画質や検索の仕方について操作性を実行した。

02. 宇野 正人 (江戸川女子短大) : 神社CD-ROM「お祭り」について

要旨: 全国の神職2500人を調査員に依頼してのワープロ記入による回答率は97%であった。8万におよぶ祭神名称・祭祀儀式名称の外字入力に苦労されたという。検索は県別を単位としている。

03. 児島 秀樹 (明星大学人文学部)・橋本 晋 (ケイワーク) : 歴史フォーラムCD-ROM (TOKOSHIE) のデモ

要旨: ニフティサーヴ歴史フォーラム会員有志によって制作された日本史人物辞典の紹介。他に三浦梅園『玄語』の電子テキスト、暦変換ソフトWHEN、1885~1945年特許出願者名簿、ゲルマン民族歴史地図、日本旧国名地図などが入っている。

第7回:「歴史研究と電算機利用ワークショップ」

研究集会オーガナイザー: 田良島 哲 (文化庁美術工芸課)

期日/場所: 1997年8月30日: 駿台電子情報専門学校

01. 富安 寛 (NTTデータ通信KK・情報科学研究所): Digital Atlas of History の開発 歴史地図編

要旨: 教育現場で利用しやすい歴史地図の作成を目標に試行錯誤してきた。モデルとして中国古代の国家版図の拡大を動態的に表現してみたが、難関は時代を遡るほど地理的座標を確実に指定できないことであった。

02. 田良島 哲 (文化庁美術工芸課): 『電子翻刻の手引き』を作ろう — 電子史料サイトの紹介を兼ねて

要旨: これまで活字組版による翻刻が主流であったが、しだいに史料の電子化が行われるようになってきた。電子化の際の取り決めを標準化する必要性が高まっているとして田良島試案が説明され、さらにインターネット上の史料翻刻について、国内での実例が各種紹介された。

第8回:「歴史研究と電算機利用ワークショップ」

研究集会オーガナイザー: 神立 孝一 (創価大学経済学部)

期日/場所: 1997年11月29日: 駿台電子情報専門学校

01. 安澤 秀一 (駿河台大学文化情報学部): 電子記録管理とメタデータ

要旨: 電子記録管理に必要なメタデータの記述について、国際アーカイヴズ評議会ICAが1997年春、標準化のモデルを公刊した。その安澤試訳を提示した。なおこの試訳はニフティサーヴのFREKI会議室16番[PRO/情報知識学会00283(1997/10/22)]に掲載してある。

02. 神立 孝一 (創価大学経済学部): データベースの構築と利用 — 多摩市史編纂での経験を中心に

要旨: 多摩市史編纂の過程で近世編を担当したが、史料収集の際の目録作成、活字目録印刷、資料編の編集、そして本文執筆にいたるまで、パソコンを活用した。それらはすべて電子化された状態で保管されている。これらをデータベースとして利用してきたし、これからも利用できる。

【報告】

第4回著作権シンポジウム

戸塚 隆哉 (KMKデジテックス)

当会主催の著作権勉強会が1997年11月27日(木)、14:00から18:00までの4時間にわたって、凸版印刷ホールを会場に、約20名の出席者を得て開催された。今回の勉強会の主旨は、学術情報の視点から著作権を見てみようというもので、気軽に出席・意見交換ができるように勉強会形式としたが、例年開催されている著作権シンポジウムの一環となるもので、通算4回目となる。講師は、名和小太郎氏(関西大学)、小山内正明氏(エルゼビアサイエンスジャパン)、苗村憲司氏(慶応義塾大学)の3氏。

まず、名和氏からは、著作権審議会のマルチメディア小委員会の委員を長年勤められている立場から、審議会の動きを中心に、著作権年表を資料に内外の著作権の状況について報告があった。

- 審議会での検討内容は、報告書の形でオープン化され、外部から意見を求めてきた。著作権を強化したいという意見が多くある一方、現状維持で良い、規制を緩和してほしいという意見もある。
- 著作権の動きは環境に応じて変化しており、当初はデジタル情報のコピーが中心であったが、インターネットの発展・普及に伴い、ネットワーク環境下でどう考えるか、という方向になってきている。
- 国際的には、WIPO(世界知的所有権機関)で、デジタルネットワークに対応した著作権条約と著作権隣接権条約を作ろうという動きについて紹介。さらに、これらとは別に、新しくデータベースにかかわる条約が提案された。著作権審議会では、現在、データベースのワーキンググループを作って検討を行っており、学会関係でも日本工学会で検討が行われている(後述苗村氏紹介)。
- さかのぼって、国際著作権条約であるベルヌ条約についての紹介があった。
- この著作権条約とWIPOの協定をどう関連づけるか、著作権条約の付録として引用するか、本文に繰り込むかといった議論があった。
- その他、著作権条約でまとまったあるいは検討された内容の紹介があった。たとえば、
 1. ネットワーク上の権利—communication to publicを認めたこと。公衆への送信権(日本では有線送信権)
 2. 「保護解除装置」の禁止については見送り
 3. コピープロテクトの解除装置に対処する規定について検討が進められている
 4. 著作物に管理ナンバーを入れる「著作権管理情報」を勝手に改変することは違法など

次に小山内氏からは、「電子雑誌と学術出版」と題して、欧米での代表的な電子出版の紹介、出版社が何をめざしているのか、共通しているのはWebベースでの提供、違いは購読料金の設定など。そして、エルゼビアサイエンス社の提供するWWWによる学術文献のフルテキストデータベースサービス・ScienceDirectの紹介があった。

提供するデータベースは、エルゼビア社の出版する 1,200 誌の学術雑誌のほかローカルなあるいは収録が困難であった他の学術出版社・学協会 of 出版物も含む。

また、検索の強化のために、いくつかの二次文献データベースも組み込まれる。インターネット上の他の関連情報へのリンクも張られており、これまでにない規模のフルテキスト情報を持ったインターネットデータベースサービスとなっている。

休憩後、苗村氏からは、「データベースに関する新たな権利保護制度案について」と題して、データベースのデータを無許諾抽出することを防止するために、データベース製作者にいわゆる「sui generis 権」(独自の権利)を創設するというデータベース保護条約案について紹介があった。

日本を含む先進国の著作権法は、素材データの選択や体系的構成に関して創作性を持つデータベースを保護することを定めているが、創作性の有無に関する判断基準は国によって異なるので、著作権法による保護の有効範囲は必ずしも明らかでない。さらに、データベースに関する著作権はそれを構成するデータそれ自体に及ばないので、利用者がその中から大量のデータを抽出して再構成した場合などに、原データベースの著作権者はこの新しいデータベースに対して権利を主張することはできない。このため、膨大な金額を投資してデータベースを開発し、販売する義者の立場からすれば、その中のデータを再利用して競合製品を販売する後発の「フリーライダー」を防止するすることに関して著作権法は無効だということになる。

こういう状況に対して、新たなデータベースの権利保護制度が WIPO などから提案され、日本でもその必要性和問題点の検討が開始された。下記に、学術・研究の発展を図る立場にある日本工芸学アカデミー情報専門部会・知的財産権 WG での検討状況が報告された。

1. sui generis 制度を新設する場合には、学術・研究分野がもっとも大きな被害を受ける可能性があることに留意し、その意見を十分に調査し尊重すること
2. sui generis 制度を新設する場合に、データベース作成者がそのデータベース内のデータに関する権利を主張するばかりでなく、さらにそれから派生する知見までにも権利を主張するということがないよう、明確な歯止めを設けること
3. 非電子的 DB にも sui generis を導入することは不必要であるばかりでなく、学術・研究の立場から見れば危険であること
4. sui generis 制度を新設するとしても、排他的権利ではなく、不競争防止を目的とする制度とするか、報酬請求権とするなどの代替案を優先的に検討すること
5. sui generis 制度を新設するとしても、学術・研究目的を含む公正な利用については fair use の理念に基づく例外規定を設けること

WIPO では、1998 年 4 月をめどに各国の意見を求め、9 月ころまでに検討のまとめを行う見通しである。日本では、通産省の産業構造審議会と文化庁の著作権審議会の配下でも検討が行われている。

以上 3 氏の報告のあと、出席者を交えて約 2 時間にわたって質疑・意見交換があった。なお、詳細については、当日下記資料が配付されたので、ご参照いただきたい。

- 1) 小山内正明. サイエンスダイレクト：エルゼビアの全文記事オンラインサービス、情報管理. 40(4),318-326(1997.07)
- 2) 苗村憲司. データベースに関する新たな権利保護制度案について. 8p. 1997.11.29

ホームページとメーリングリストの開設案内

情報知識学会理事 後藤 智範

1. ホームページ

前号でもお知らせしたように、当学会のホームページの URL は下記のとおりです。

<http://angelos.ed6.info.kanagawa-u.ac.jp/passwd.html>

パスワード入力が煩わしいとの意見があり、現在パスワード無しでホームページに入れるようになっております。

学術団体のホームページとしては内容が不十分ではありますが、この1ヶ月余り問題なく稼動しておりますので、前号でお知らせしましたように4月からの完全公開を考えております。

2. メーリングリスト

現時点(1998年1月15日)で約155名の会員のe-mailアドレスを把握しております。前号から5名の増加です。、それでも全会員の半分以上です。

前号でもお知らせしたように、上述の当学会ホームページの表紙に「メールアドレス登録会員一覧」があります(この措置は一時的なものです)。これをクリックすると、e-mailアドレスを登録していただいた会員について、下記の3項目が列挙してあります。

氏名の読み、氏名、氏名のローマ字

名が判明しない方が数名おりますので、名が記述されていない方、3つの項目で誤った表記で記述されている方につきましては、下記宛てにお知らせください。登録されていない会員で、e-mailアドレスをお持ちの方も、上記の3項目を明記の上、下記宛てにお知らせください。

gotoh@info.kanagawa-u.ac.jp

現在、メールサーバーの項目設定、テスト使用に入っております。メーリングリスト登録者宛ての運用テストを2月中に行ない、この間に各種メーリングリストのアドレスをお知らせできるかと思います。

【お知らせ】

年会費納入の時期と方法

本年4月からは平成10年度となります。次号のニューズレター No.49（4月1日発行）を郵送する際、郵便振替用紙（赤色の払込取扱票。手数料は学会負担）を同封しますので、本年5月末までに平成10年度個人会費8千円を納入してください。学生会員は半額です。賛助会員（法人会員）は金額が異なるため、請求書を4月以降に別送します。

平成9年度以前の年会費および臨時会費を未納のかたは、その分も合わせて納入してください。このニューズレターをお届けした封筒の宛名ラベルには、会員各自の会費納入状況を次のように印刷してあります。どうぞ、ご確認ください。[] の中は納入された年月日を示しており、空欄ならば未納です。

例えば、以下のようになります。

印字→ 1996[960516] 1997[970428] 臨時[971230]

1996年度年会費5千円を1996年5月16日に納入した。

1997年度年会費5千円を1997年4月28日に納入した。

1997年臨時会費3千円を1997年12月30日に納入した。

なお、平成10年度から年会費は8千円となりましたのでご注意願います。郵便局に備え付けの（青色）用紙で下記の口座へ振り込むこともできますが、手数料¥70はご本人負担です。

郵便口座番号 00150-8-706543
加入者名 情報知識学会

事務簡略化のため、個人会員のかたには原則として請求書・領収書を省略していますが、必要な場合はどうぞ遠慮無く事務局へお知らせください。

平成9年度限りで退会なさるかたは、本年3月末日までにFAX、郵便、電子メールのいずれかで退会届を事務局へお出しください。その際、平成9年度までの年会費、臨時会費など未納分があれば全額納入してください。

情報知識学会事務局

TEL:03-3835-5692

FAX:03-3837-0368

E-mail:LDE01013@niftyserve.or.jp

コンピュータはすでに人文諸学でも必須のツールとなっています。

Association for Literary and Linguistic Computing の公式機関誌 LITERARY & LINGUISTIC COMPUTING は文学、言語学へのコンピュータ応用のトップ誌としてこの領域を牽引してきました。電子テキスト、テキストエンコーディング、ソフトおよびハードからテキスト分析、意味論、統語論に至るあらゆる領域の最新の研究結果が論じられるばかりでなく、学会レポート、書評、ノートなど学会機関誌らしい多彩な情報が掲載されます。

- ◆ OUP ホームページ : <http://www.oup.co.uk>
- ◆ 英国へのお問い合わせ : jnlinf@oup.co.uk
- ◆ 英国への電子オーダー : jnorders@oup.co.uk
- ◆ 日本支社へのお申し込みは : FAX: 03-5995-3415 までお送りください

オックスフォード大学出版局 〒171 東京都豊島区要町2-4-8 TEL: 03-5995-4931

サンプル希望 購読希望 (97年購読料: \$67) ... ○でお示し下さい

御氏名: _____

所属: _____

FAX/TEL: _____

◆◆◆◆◆
■編集後記

1月に大雪が2度関東地方に降りました。雪に慣れていない多くの人が困ったようです。かく言う私も滑る路面で何度か転びそうになり、靴屋に長靴を買いに行きました。ところが考えることは皆同じで、靴屋には臨時に長靴コーナーができており、たくさんの人が長靴を買い求めていました。

パソコン、プリンタ、インターネットなど日頃使っている情報環境にも時々大雪のようなトラブルが降ってることがあります。こちらも長靴に相当するものを用意できればいいのですが、日頃はなかなか用意しておこうとは思いません。皆さんは長靴をお持ちですか？

ニューズレター編集委員 宇陀 則彦

■複写をされる方に

R <学協会著作権協議会委託>

日本国内における、当ニューズレターからの複写許諾は、学協会著作権協議会から得てください。

学協会著作権協議会

〒107 東京都港区赤坂9-6-41

TEL: 03-3474-4621, FAX: 03-3403-1738

アメリカ合衆国における複写については、Copyright Clearance Center, Inc. から得てください。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA. 01923, USA

TEL: 508-750-8400, FAX: 508-750-4744